

# 富士山をフィールドにした冒険的な活動とその安全対策

静岡県立富士宮西高等学校

難波利行

## 1 はじめに

平成25年6月に富士山が世界文化遺産として正式登録され、富士山の登山者の今以上の増加が予想されるとともに、無謀な登山者による事故の危険が叫ばれている。登山において安全が最優先されることはいうまでもない。とはいえ、登山の魅力の一つが苦痛や危険を乗り越え山頂を極めることであることを考えると、事故を恐れるが故に、チャレンジしないのでは、登山の魅力が半減してしまうことも事実である。従って、チャレンジ精神を持ちながらも事故を起こさないための安全対策を講じていくことは非常に重要である。静岡県立富士宮西高校のワンダーフォーゲル部では、夏合宿や月例山行以外に地元富士山を舞台にした冒険的な活動として、平成22年度に青木ヶ原樹海横断、23年度に村山道～吉田道（0m～3776m～850m）を行った。そこで、本研究では、これらの冒険的活動を実施するにあたって行った準備から活動の記録を整理して、効果的な安全対策を抽出することで、高校生の冒険的活動を安全に実施するための知見を得ることを目的とした。

## 2 富士宮西高校ワンダーフォーゲル部について

富士宮西高校ワンダーフォーゲル部は創部29年目を迎え、地元富士山を活動の拠点とし、四季を通じて山に登り、またスキーやフリークライミング、そして登山競技にも力を入れ活動している。

### (1) 部員数および大会結果

	1年	2年	3年	合計	全国高校総体	全国高校選抜クライミング選手権
H22	男子 11	男子 11	男子 7	44	男子 2位	男子団体 5位
	女子 7	女子 6	女子 2		女子優勝	女子団体 4位
H23	男子 5	男子 10	男子 11	41	男子 8位	
	女子 2	女子 7	女子 6		女子 4位	女子団体 3位
H24	男子 7	男子 5	男子 10	33	男子 7位	男子個人 29位
	女子 4	女子 2	女子 5		女子 2位	女子団体 5位

3年生は基本的に5月で引退だが、一部の生徒は夏合宿や月例山行にも参加している。またインターハイやクライミング大会で全国大会出場を目指す生徒は、5月以降も競技に関わる活動を続けている。

大会には、高校総体や国体、全国高校クライミング選手権にほぼ毎年出場している。特に女子はインターハイにおいて、この10年で3回全国優勝している。

### (2) 練習内容

平日は毎日6～10Kmのランニングおよび筋トレ、あるいはボッカトレ（ザックを背負った歩行訓練）を行っており、平均して月に1回ずつ宿泊を伴う山行と日帰りの山行を行なっている。雪山も登っており、2月には富士山御殿場口で雪上訓練を行い、3月には八ヶ岳や奥秩父で、5月には北アルプスに登っている。地元富士山には、清掃登山や富士宮市親子登山の手伝い、肢体不自由者車椅子登山などで平均3～4回夏に登っており、年に1回富士宮口でタイムトライアルを行なっている。男子生徒のほとんどは2時間以内に、女子も2時間半以内で山頂まで登る。一番速い者は男子で1時間20分、女子は1時間40分である。クライミングは希望者のみであるが、通常の山の活動をしながら週2～3回県内外のクライミングジムに通って練習している。体力は安全登山の基本であり、今回の活動も部員に体力が備わっていることが前提であった。

### 3 活動内容

#### (1) 青木ヶ原樹海横断 (平成 22 年 11 月 7 日)

##### ①目的

- ・ 樹海のような道のないところをまっすぐ進む方法を身につける
- ・ 樹海の自然の美しさを感じ、富士山の山麓部の魅力や成り立ちを学ぶ

##### ②概要

青木ヶ原樹海は富士山の北麓に広がるツガやヒノキなどの針葉樹とミズナラなどの広葉樹が混生した森林であり、面積は 30Km<sup>2</sup> と言われている。この森林は 9 世紀に富士山北西斜面で起こった噴火により流れた溶岩の上に 1200 年かけて形成されたもので、森林としては比較的若いものである。いまだに浅い腐葉土しか持たず、樹木はその腐葉土や倒木の上に根をむき出しにして生えている。遊歩道や林道から覗けばすぐに分かる通り、溶岩流の凹凸（直径 5 m、深さ 2~3m 程のくぼ地が無数にある）と倒木がいたるところにあり、まっすぐに歩くことは困難である。磁性溶岩のため磁石が全く効かないとよく言われるが、場所によっては磁石が微妙にずれるものの、ほとんどの場所では普通に磁石が使える。

今回横断したのは、図 1 の地図に示すように、国道 139 号線が最も北側を通る西湖への分岐点から、精進湖登山道が開拓道路を横切る地点までである。この区間を選んだのは、林道や歩道が全く通っておらず、また磁北から磁南へ進むことができるため磁石を使って方位を確認することが容易であるためである。

##### ③安全対策

###### ○まっすぐ進む方法

高さ 2 m 程度の棒を 3 本用意し、3 人がそれぞれ棒を 1 本ずつ持つ。別の一人がコンパス（方位磁石）を見て進む方向を見定め、棒を持っている 3 人をおよそ 10m 間隔で進むべき方向に一直線に並べる。（正確には棒を一直線に並べる）コンパスを持っている人間（ナビゲーター）に近い順から 3 人を A, B, C と呼ぶ。ナビゲーターは一番手前の A のところまで行く。コンパスを見ながら A を C の先およそ 10m の位置に移動させ一直線を作る。このときの順番はナビゲーターに近い人から B, C, A になっている。次にナビゲーターは B の位置まで進み、今度は B を A の先に移動させる。この操作を繰り返すと確実に一直線に進むことができる。（図 2）

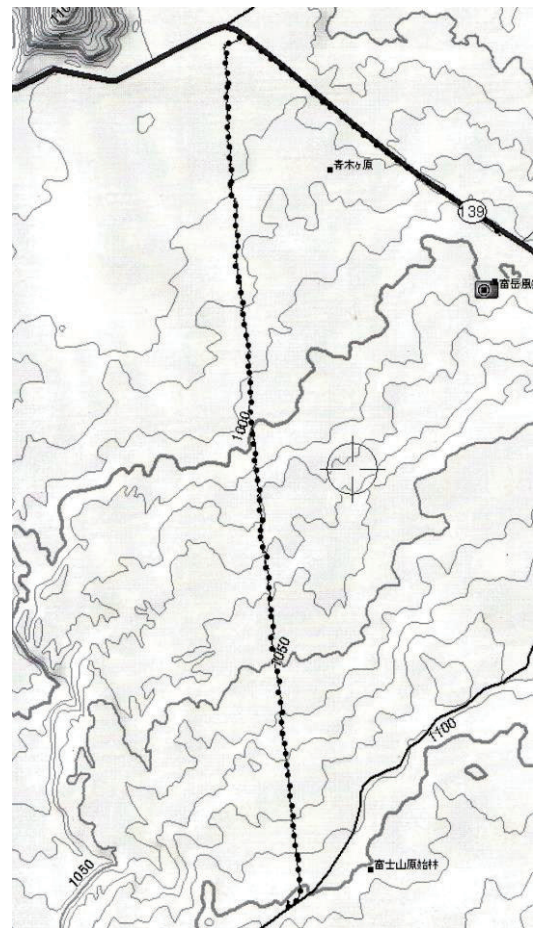


図 1. 横断コース約 4 Km GPS データ

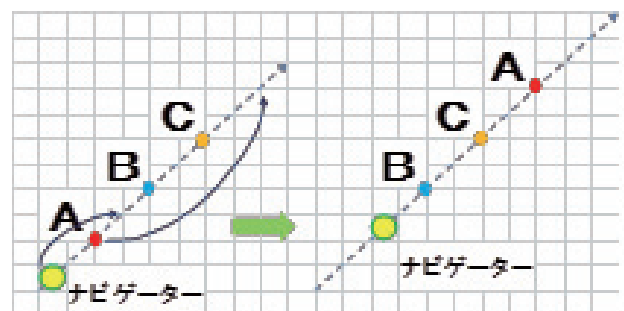


図 2. まっすぐ進む方法

## ○万が一迷った場合の対策

富士山の中腹以下では傾斜が緩いため、不用意に森に入ると方向を失うことが多い。特に今まで歩いてきたルートを失うとかなり焦るものである。このため赤布を 500 本用意し、最後尾の者が枝にくくりつけていき、万が一迷っても必ず引き返すことができるようにした。また念のためにGPSを持参した。GPSは進んできた経路を補助的に確認するためと記録用である。

## ○装備

通常の登山装備（雨具や防寒具・食糧や飲料水・ヘッドランプ・コンパス・地図などの個人装備、医療缶・ツェルト・ロープ・ラジオ・修理具などの共同装備）のほかに、上記の棒 3 本、赤布 500 本、GPS



写真 1. 樹海の中を進む

## ④記録（参加者 38 名うち生徒 35 顧問 2 父母 1）

7:13、学校出発。父母の車で富岳風穴まで送ってもらう。

8:38、歩き始める。しばらく国道 139 号線を西へ進む。

9:00、予定の地点から樹海に突入。すぐに東海自然歩道を横切り再び樹海へ。樹海のなかは穴だらけで穴を回り込んで進むと方向感覚を完全に失う。先に進む棒部隊が予想外の方向にいたりするが、磁石を見ると確かにそちらが真南である。そんなことがたびたびあった。またところどころ灌木帯になっており、そのような場所では密生する細い木立で視界がささぎられ、棒が見えにくく苦勞する。樹海の中は美しい森であるが、やはり早くここから抜け出したいという気持ちが働くのだろうか途中 10:55 と 13:10 に小休憩を入れるものの、大きな休憩は取らずに進む。やがて左手から自動車のエンジン音が聞こえるようになってくる。開拓道路はもう近い。

15:36、道路に出る。あらかじめゴールに置いてあった私の車が 30mほど先に見える。ほとんど誤差なく予定通りのコースを歩くことができた。ここで記念写真を撮り、生徒たちは父母の車が待つ 2kmほど先の駐車場まで歩いた。

## ⑤生徒の感想

青木ヶ原樹海に行くとき聞いた時にはゾッとしました。歩いているときに嫌なものがあるのではないかと感じていましたが実際は全く違いました。とてもきれいで「もののけ姫」の舞台みたいな所だと思いました。先頭で棒を持って歩いている人たち以外はのんびり歩いていましたが、先頭の人達は顔がマジでした。無事に帰れたのは先頭の人達が一生懸命に道を正確に進んでくれたからだと思いました。ありがとうございました。新しいことに挑戦できてよかったです。(2年女子)

(2) 村山道～0メートルから山頂へ、そして吉田道を富士吉田浅間神社まで(平成 23 年 10 月 8 日～9 日)

### ①目的

- ・地元の高校山岳部員として、最近復活した古道を歩き、富士山への理解を深める。
- ・長時間の歩行と今までに経験したことのない標高差を歩き通すことにより、現在の体力を確認する。

### ②概要

村山道(村山古道)は平安時代末期に修験者の登山道として開かれ、千年以上利用されてきたが、明治時代になって廃仏毀釈と新しい登山道の付け替えによって廃道となり、百年近く放置されたままであった。それが最近になって(2004年以降)神奈川県在住の畠堀躁八さんをはじめとする有志によって発掘・整備され

てよみがえった。ルートは田子の浦から吉原宿、村山浅間神社を経て、六合目で現在の富士宮口登山道に合流し 3776m の富士山頂に至る。整備されたといっても、まだ通る人は少なく、特に標高 500m から 1000m にかけての植林帯は、林道や仕事道が複雑に交差しており、正しくルートを通ることは難しい。コースが長いので、道を間違えて時間をロスすることは避けたいところである。

今回私達が選んだコースは、田子の浦からこの村山道を通って富士山に登り、そのまま反対側（山梨県側）の吉田口を下山ルートにとり、五合目からこちらもスバルラインの開通によって廃れつつある古の参道を通り吉田浅間神社まで下るものである。全行程の標高差は登り 3776m、下りはおよそ 2900m である。

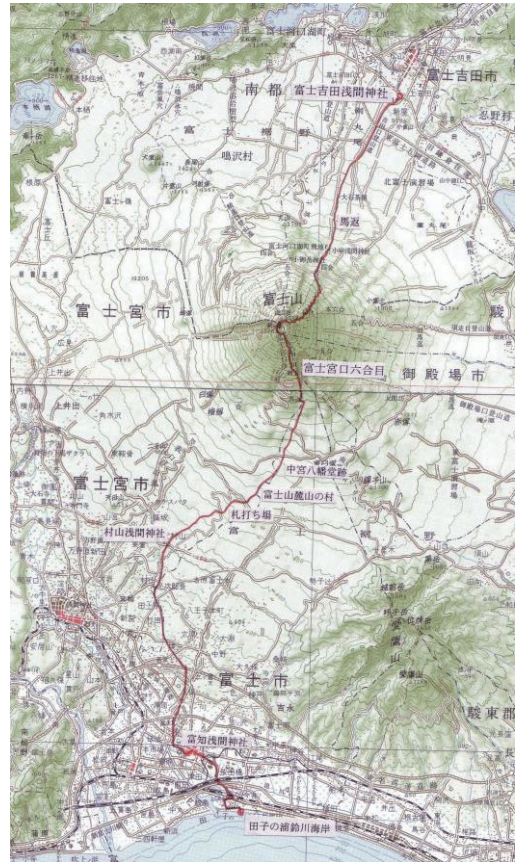


図 3. 村山道+吉田道の全行程

### ③安全対策

#### ○コースの長さへの対策

1 日目は標高差 1080m、距離約 27Km。2 日目は標高差にして約 2700m を登り、2900m を下ることになり歩行距離は約 35Km である。体力的な厳しさもあるが、時間との戦いでもある。日帰りは無理なので、コース上にある富士山麓山の村を利用し、食事、寝具もお願いした。これによって幕営具や炊事用具・食料を持たない空身となり、なによりスピードを上げることができる。アスファルト道を長く歩くため、秋とはいえ熱中症の心配があり、また少しでも荷物を軽くするため、途中 1 か所コンビニに寄り、飲料水や食料の補給を積極的にさせることにした。生徒たちは夏にボランティア登山で富士山に 3 度登っているため、標高差 2700m の登りはなんとかなるであろうと思われた。しかし、そのあとに続く 2900m の下りは経験なく、1 日目のアスファルトが与えたダメージを考えると、離脱者が出ることも予想された。その場合は吉田口五合目で打ち切りということにした。もちろん 10 月の富士山は悪天候になれば雪山になるので、好天であることが絶対条件である。

#### ○装備

車道が長いので靴ずれが心配であり全行程空身（サブザック行動）であることから運動靴か登山靴（トレッキングシューズ）か迷ったが、下りの長さや、整備されていない道で足場が悪いところがあると予想してトレッキングシューズに統一した。

#### ○道迷いへの対策

1 日目のコースは序盤が市街地、やがて田園地帯となり、この部分は車道であり、もちろん交差点や分岐などが無数にあり、道を間違えて時間をロスする可能性はいくらでもある。このため、この部分は顧問が何回かに分けて下見をした。村山浅間神社から問題の植林帯に入るが、島堀さんが書いた「富士山村山古道を歩く」（風濤社）を片手に慎重に歩くしかない。またインターネットにも何件か村山道を歩いた人の記録が写真付きで載っているため、それも参考にした。

### ④記録（参加者 21 名うち生徒 20 顧問 1）

10 月 8 日 初日

7:45、吉原駅集合。天気は曇り。田子の浦の鈴川海岸の海水で手を清めた。数人は波に襲われ、早々と靴を濡らした。(写真2)

8:20、みんな好きな石を持って富士山を目指して出発。あいにく富士山は雲に隠れて見えない。

8:35 富士塚に到着。石を奉納して記念写真を撮った。

9:04、旧国道一号を横切る。このあたりから交通量が多くなり緊張する。吉原の商店街を抜け、10:00に富知六所浅間神社に着き、トイレ休憩とした。七五三のお祝いをしている親子などがいた。東名高速・西富士道路をくぐり、新東名の橋を渡ると緑が目立ち始め、少しずつ起伏がでてきた。

11:37、釈迦堂通過。

11:50、最後のコンビニである大淵のローソンに到着。アスファルトの上を歩いているせいか、足が疲れる。生徒の一人が発熱のため離脱。親の迎えを待つ。急に傾斜が目立つようになり、列に間ができ始めた。いくつか分岐があり、先頭に行くものが道を間違えるたびに、先頭が変わっていく。

13:12、村山浅間神社着。大きなイチョウの木の下でゆっくり休憩する。ここからしばらく進むとアスファルト道が終わり、足が少し楽になる。五辻と呼ばれる地点で林道が終わり、ようやく山道に入る。ところどころ道が深くえぐれており、歩きにくい。

15:10、札打ち場に到着。

15:47、天照教に到着。久々のアスファルト道を横切る。

16:14、山の村到着。

## 10月9日 2日目

5:00、出発。ヘッドランプで照らして進んでいく。

5:50、大淵林道。山の村で作って頂いた朝ごはんを食べる。快晴。雨は降りそうにない。

6:17、中宮八幡堂跡に到着。

7:24、高鉢から御殿庭に至る登山道と交差。このあたりから傾斜が急になる。途中大倒木帯に出る。廃仏毀釈で首の切られた仏像がある。下に茂るイバラをよけながら歩く。富士山がよく見える。傾斜がどんどんきつくなる。

9:28、六合目到着。



写真2. 田子の浦海岸



写真3. 富士山剣ヶ峰山頂



写真4. 富士吉田浅間神社

10：48、元祖七合目到着。

11：52、九合目到着。

13：00、富士宮口山頂に到着し、昼食とする。いい天気だが雲が出始めた。

13：26、剣ヶ峰に到着し、三角点にタッチする。田子の浦から持ってきた石を奉納、そして記念写真を撮る。  
(写真3)

14：06、吉田口・須走口下山道に入る。霧が増えてくる。五合目上の仏像のあるところに16：00着。

17：37、馬返し。辺りはすっかり暗くなる。ここからは舗装道路だが、真っ暗。中の茶屋からは道も広くなり、人工的な光も見えてくる。

19：18、吉田浅間神社に到着。(写真4)

#### ⑤生徒感想

○田子の浦から富士山の裏側の山梨までというハードな山行だった。でもサブザックだったからみんなと話しながら登れて楽しかった。ゴール後の解放感はすばらしかった。(2年男子)

#### 4 まとめ

山行のレベルは体力度と技術度で決まる。さらに技術度は岩場や雪上技術を含む歩行技術と、ルートファインディングや天候判断などの総合的判断力に分けられる。このうち、体力と歩行技術については生徒が必ず身につけなければならないものであり、日ごろのトレーニングや、フリークライミング・雪上訓練あるいは普段の山行で養われる。一方、総合的判断力は顧問が必ず身につけなければならない技術であり、生徒をただ安全に山に連れて行くだけならば、生徒にはそれほど必要な力ではない。しかし、実際に生徒は卒業しても山に行くわけであるから、生徒にも総合的判断力を身につけさせることが望ましく、どの登山部も当然そのように指導しているはずである。この力を身につけるには、1つに色々な知識を得ることである。登る山域の特徴やガイドブックに出てくる登山用語の意味を知り、さらに装備や気象、地図に関する知識を得ることは安全登山に欠かせないことであり、それゆえ、これらはインターハイの登山競技の審査項目にもなっている。しかし、それ以上に重要なのは経験であり、それも単に山に登るだけでなく、山で判断する経験を積むことである。そのためには生徒に考えさせ、判断させること、すなわち生徒にある程度任せることが必要になってくる。たとえば生徒に先頭を歩かせたり、休憩のタイミングを選ばせたり、計画そのものを立てさせたりすることである。これによって生徒はときに失敗もするが、経験を積んで実際的な力を身につけていく。またこれが一番重要だと私は個人的に考えているのであるが、生徒自身も、ツアー客のように顧問にただ連れて行かれて参加するよりも、自分達で判断することで、はるかに大きな充実感を得ることができ、山行に喜びを見出すことができる。これは登山というものが、多少なりとも危険な状況に身を置き、その状況を自分たちの力で切り抜け、登頂という最終目標を達成するスポーツであるからであろう。そして、困難であればあるほど、その山行から充実感が得られ、同時に登山者としての技術力を養うことができる。もちろん、高校登山ではこのようなアルピニズム的な要素は極力排除されてはいるが、生徒の経験値を上げるために活動のレベルアップを図ろうと真剣に考えれば考えるほど、安全度は確実に下がっていくのではないだろうか。(たとえば生徒に先頭を歩かせれば、事故が起こる確率は間違いなく増える。)

今回紹介した2つの活動は、冒険的要素が強いために、当日のナビゲーターを顧問が行うなど生徒に判断させる場面は減ってしまったものの、事故を起こすことなく安全に実施することができた。生徒の経験値を上げる活動と安全性とのバランスを、いかにとっていくかは、登山指導者の永遠の課題とも言える。生徒がルートファインディングする場面がもっとあっても良かったとの思いもあるが、事前準備から当日のナビゲートに至るまで、顧問の背中を追いながら冒険的活動をやりきったことで、登山に必要な多くを学び取ってくれたと確信している。